

■ バニーエルザはショタの催眠肉便器 4日目

——依頼四日目。

昨日のあまりに奇妙な快楽現象の餌食となったエルザは、証拠探しに躍起になっていた。

(このままでは取り返しのつかないことになってしまう！ 早く術式を見つけなければ、本当に……)

初日から、家事と性処理以外はほとんど何もできていない。早く手がかりの一つでも見つけたいところだが……

【お、やってるねー】

様子を見に来た少年が挨拶に来る。離れようとするが、伝えたいことがあるらしく……もう何度となく見せられた、手を叩く癖をまた見せられる。

——パンッ！

◆

【さて、今日は……】

少年は手を叩く合図でエルザの動きを止め、弄ぶための催眠暗示を思索。

テーマを『視姦』に決め、それに合わせて暗示を重ねていく。

『視姦される欲求が生まれ、視線や見られていることを感じただけで快感を得る』

『羞恥心十倍』

『人がいると言われれば、たとえウソでも本当に人がいるように思ってしまう』

いくつか暗示を施した後、また手を叩いてエルザの意識を戻す。

——パンッ！

◆

「……何だ、言いたいことがあるなら……」

【せっかちななあ、そんなにイライラしないでよ。あ、もしかして溜まってた？】

「お、おい、近付くな……あっ♥」

伝えたいことをもったいぶり、バニースーツになっているエルザの尻や胸をジロジロと眺めた後、適当な理由で触れてきた。

後ろから密着するように近付くと、大きな尻肉を掴んでグイッと持ち上げてくる。

エルザの身体にはまだ先日の媚薬やおかしな魔法の効果が残っているらしく、力任せに揉まれただけでスイッチが入ったように発情させられる。

【気付けなくてゴメンね。肉便器のメンタル管理も主人の仕事だよな】

「わ、私は……お前の肉便器などではないっ♥」

（くそっ、また身体が熱く……♥）

こいつもこいつだ。あれだけ犯しておいて、まだ私の身体に飽きないのか……厭らしく、ジロジロと……っ♥）

気のせいかな、今日の少年はやたらとエルザの身体を凝視してくる。

それでいて身体は昂ぶるので、まるで視姦に感じてしまっているような錯覚を覚えそうだ。

【うわ、三日間調教しただけでスゴいドスケベな身体になったね。何このお尻……恥ずかしくてもう人前に出られないんじゃない？】

「黙れっ！ 私は変わってなどいない……んっ♥ 服装さえまともなら、何も問題は……」

【ちなみに今、お客さんが一人来てるんだけど】

「……………な……?!」

客、つまりエルザや少年ではない誰かがこの屋敷に来ている。

それを知った途端、エルザはなぜか身体が更に発熱し、下腹部がキュッと締められ、腰が僅かに浮くような感覚に陥る。

(誰か、来ている……のか……？ つまり……私の、この姿を、見られ……)

困惑する間にも少年のセクハラはエスカレートする。

左右の尻肉を揉みくちやに弄り、僅かに零れた愛液を器用に掬い取って卑猥な粘音を響かせる。

「や、やめろっ！ 人が来ているのなら、こんなところを見られては……」

【じゃあ静かにしてよ。バレたらお互いにマズいよね？】

「しかし……あっ♥」

本当に誰かが来ているのなら、エルザはもちろん、少年も見られるわけにはいかないはず。

声を潜めて注意するも、少年はスリルを楽しんでいるのか、セクハラを止める気配がない。

エルザの尻を掴んで引っぱり、突き出させ……更に人には見せにくいポーズにして愛で続ける。

【一回イクまでやめないからね】

「誰が、イクかっ♥ んっ♥ やめろと言って……っ♥」

【見られたくないなら早くイッてね〜♪】

魔法の支配力、何より快感で抵抗できず、尻を捧げたまま愛撫のたびにビクンッと震えることしかできない。

(本当に誰かが来ているなら、早くやめさせなければ……しかし、確かにどこかで人の気配が……♥)

こ、こんなところを見られてるわけには……っ♥)

ウソであればそれに越したことはないが、少年に言われれば……確かに人の気配があるように思えてくる。

すぐにでもやめなければ、その客人とやりにいつ見られるか分からない。

自分には敵わない、ただの一般市民が相手であるがゆえの緊張。それを払拭するため、少年から逃げようとするが……

【やばっ、見られた！】

「っっ?!」

(ほっ本当に見られ……っ?! 私が、こんな奴に屈している様が♥)

触られて無様に喘ぐ、肉便器にされていることが……♥ 見られ……っツツ♥)

ついに見られてしまった……少年の言葉でそれを知ったエルザは、確認するまでもなく緊張に心身を呑み込まれる。

あられもない痴態、無力なはずの少年に屈している無様っぷり……それを目撃されてしまったと思うと、

なぜか緊張と同等、いやそれ以上の背徳的高揚が湧き上がってくる。

「お前っ♥ もうやめっ♥ これ以上はっ♥」

(ダメだっ♥ イッてしまうっ♥ 見られているのにいっ♥♥)

視線を感じているはずなのに熱くなるエルザの肉体。

まるで視線によって撫でられているように、背筋、尻、秘部にゾクゾクとした電流が奔り――

「んんうううううううう♥♥」

最後は少年の指によって秘部をかき回され、蓄積した快感が爆発。

喘ぎ声は少し抑えられたものの、股間からは半透明の粘液を噴き出し、素人目にも分かる絶頂反応をしてしまう。

(み……♥ 見られた……♥ 誰とも知れぬ者に♥ イクところを……っ♥♥)

少年にセクハラされている場面だけでも見られてはならないというのに、よりによって達してしまう瞬間を見られてしまった。

絶望感や失意、そしてそれに比例して増していく背徳的興奮。それらに支配され、エルザは力なく膝を崩す。

【ふ――、危なかったあ】

「お前……ど、どうするんだ……っ♥ 何も知らない者に、見られ……」

【あ、大丈夫大丈夫。ちょっと目が合っただけで、角度的にエルザさんは見えなかったっばいから】

「そ、そうなのか? それなら……いいが……」

【もしかして、エルザさんの的には見られた方が興奮した? エルザさんドMだから視姦されるのも好きだよね】

「っ……! ふざけるのも大概にしろっ!」

悪趣味な冗談で茶化してくるので、流石に叱りつける。

……だが実際、見られていなかったことに対し、心のどこかで残念に感じてしまっていた。

(見られて……いなかったのか……。い、いや……それでいいんだ……っ)

気のせい。もしくは、少年に調教されて一時的におかしくなっているせいだ……と思うことで自身の中の淫らさを否定。

しかし身体はそうはいかず、少年に引っぱり張られても力が入らず抵抗できない。

【じゃ、部屋いこっか】

「待て、なぜそうなる!」

【いや、一旦隠れないと、ここにいたらすぐ見つかるよ? ちょっと話してくるから待っててよ】

「……早くしろ……!」

力が抜けているため、すぐに隠れられる場所が少年の部屋しかない。仕方なく部屋の中で待っていると、すぐに少年が戻ってくる。

「おい、もういいのか?」

【あ大丈夫。ちょっと屋敷を見て回ってるだけだから】

「見て回っている? ではこの部屋も……」

【あ、部屋とかは大丈夫。逆に部屋以外は見られるから、しばらく部屋にいた方がいいかな】

客人はこの豪邸とも言える屋敷に興味があるようだ。幸いにも部屋……プライベートな空間は見られないようだが……

逆に言えば、見つからないためには客人が帰るまで部屋の中にいなければならないことになる。

【てことで、早速続きやろっか♪】

「なっ……お前、この状況でっ!」

エルザがしばらく自分の部屋にいる。その状況に興奮したか、少年はすぐにセクハラを再開させる。

しかも入口のドアを少し開けたままで、だ。

【だって部屋から出られないんだよ、他にやることないじゃん】

「ならばせめて、ドアを閉めろ! このままでは、下手をすればまた見られるぞ!」

【エルザさんはその方が愉しめるでしょ? さっきも見られた途端にイッてたし】

「あ、あれは……! 違う、私はイッてなど……っ!」

どこまでも他人がいることのスリルを楽しむのか、見られる可能性が僅かとはいえ残る状況での性交を望む少年。

しかもそれをエルザの望みであるかのように扱われてしまう。

【ほら、早く済ませないとホントにヤッてるよこ見られちゃうよ〜？】

「本気なのか……？ く……っ」

(仕方がない……客人が帰るまでの時間稼ぎだ……)

悔しいが、少年に責められれば酷く淫らに喘いでしまう。少しでもその状態を短くするため、今回はエルザから奉仕することに決める。

「わかった……なら、お望み通り、奉仕してやる……感謝しろ……！」

【お、パイズリか。いいねー、手早く頼むよ】

少年の肉棒を持ち、胸の間に挟む。ずっしりと重く巨大、それでいて焼けたように熱い肉塊が胸乳に埋もれていく。

「っ……」

(……相変わらず、凄まじい存在感だ……私はこんなもので犯されていたのか……♡)

ただ胸で挟んでいるだけだが……やはりその大きさ、ただだけで分かる精力は圧倒的な存在感を誇る。

密着しただけでこちらにも本能を炙られたように性欲が再び昂ぶってくる。

(長引けば……また、こちらが先に参ってしまう……♡)

こんな絶倫巨根を相手にしては、例え責められていなくとも頭がおかしくなりそうだ。

客人に見つからないためにも、エルザは早く射精させるためにペースを上げて扱っていく。

「んっ……♡ どうだ、気持ち良いだろう？」

【いやいや、そんなんじヤイケないって。パイズリしてるとこ見つかってもいいの？ それともハメる？】

かなり激しく扱っていたつもりだが、少年には刺激が足りなかったらしく、逆に挑発されてしまう。

「言ってくれるな……いいだろう、すぐにイかせてやる……！」

わざわざ奉仕しているのに無碍に扱われてプライドを傷つけられたエルザ。

ならば望み通りすぐにイかせてやろうと、胸での締め付け、扱く速度をより強くする。

顔ほどもある爆乳が激しく上下し、巨大な肉幹を抜き上げる。

だが巨根に強く胸を擦り当てることで、逆にエルザの方も快感を得てしまう。

「ど、どうだっ♡ 我慢するな♡ は、早く、イケえ……っ♡」

たぶんっ♡ にゅぶっ♡ じゅぶっ♡ ぶるんっ♡

【うっわ、エルザさんドスケベすぎ♪ そんなパイズリできるとか、もうただの淫乱女だね♪】

「なっ？！ 黙れっ！ いいから、早く出せっ……♡」

【いやー、まだまだ刺激が足りないかなー。ていうか、むしろエルザさんの方がイキそうになってない？】

「お前っ、言わせておけば……っ♡ くふうっ♡」

(くそっ、誰のせいでこんなことをしていると……♡ しかし、こいつの言う通りだ……♡)

早く出させないと……い、イッてしまうかもしれない……っ♡ どうすれば……っ♡)

胸奉仕は犯されこそしないが、間近で巨根の感触、熱、精液の匂いも感じてしまう。

今の発情状態ではこれらを感じ続けるだけで達してしまいそうだ。

しかしこれ以上どうすればいいのかエルザには分からない。悩んだところに少年から注文が下る。

【エルザさん、イカせたいならせめて淫語使うとかしてよ】

「な……淫語だと？」

【それくらいのサービスはしてよ。別にウソでいいんだからさ】

「そうはいうが……んっ♡ どうすれば……♡」

【えー、中出しされた時はノリノリで言いまくってるよ？】

「う、ウソをつけ！ そんなこと知らんっ……記憶にはないっ！」

【いいから早く淫語サービスしてよ。……しょうがないなあ……】

—— パンッ！

【『口から自然に淫語が出てくる』『出てくる淫語はある程度、本音が含まれる』

……ほら早く早く】

「っ……」

(こんな奴に、そんな下品な真似、できるわけが……しかし……)

全く思いつかないではないが、やはり強い抵抗がある。悩んでいたエルザだが……

「ちんぽっ♡ ぶっどいおちんぽおっ♡ おっぱいの中で♡ もっと気持ち良くなってくれえっ♡」

(っっ？！ な、なんだ、口が勝手に……っ！)

少年が何やら呟いた後、エルザの口から淫らな言葉が自然と飛び出ていく。

しかもただ淫らなだけでなく、声の大きさもそれなりにある。

ドアが閉じきっていない今、客人が部屋の近くにいれば確実に聞こえてしまう声量だ。

「あっ♡ 凄いや♡ おちんぽが気持ち良すぎてっ♡ こっちの方がイカされそうだっ♡ このおちんぽ妻すぎるうっ♡」

【その調子その調子♪ なんだ、ヤればできるじゃん】

好き勝手言うのを無視し、ドアの前に立って適当に身体をくねらせる。

普通の男であれば充分発情できるものであり、少年に言われたせいか客人がこの踊りを見て欲情したら……と、つい意識してしまう。

(誰が……見られるのを、期待など……)

【ほら、もっと蟹股になって。前に教えなかったっけ？】

「……………」

リクエストされ、黙って蟹股になる。

股間が強調されるポーズになり、これだけでも羞恥心が強いが、更に少年を興奮させるために腰を前後させる。

自然と胸も揺れ、エルザの女体美が存分に活かされた踊りである。

【そうそう、もっと自分のエロいところを見せ付ける感じだよ。実際に奉仕してるのをイメージして】

「……………」

黙ったまま続けるエルザ。だが少年に言われ、実際に奉仕した時の感覚を意識させられる。

今の踊りは大きく脚を開いて腰を前後させるもの。

この動きは素股の動きを意識させ……陰唇や陰核に少年の巨根を押し当てられたら、という想像が働いてしまうのだ。

(お、落ちて……実際には、何も当たっていない……♡ こんなもので興奮するな……客人が、見ているかもしれんのだぞ……♡)

心の中で自制しようとするが、実際には想像によって動きに熱が入り、無自覚に艶めかしいものになる。

股間がクンツと高く上がり、いかにも雄にアピールした動きだ。

【ちょっとよくなってきたよー♪ もう少し動きを激しくしようか】

「……………」

(調子に乗るな……！ これ以上は……♡)

言われてすぐに応えては、少年が付け上がってセクハラがエスカレートするおそれがある。

聞こえないフリをして今回の指示をスルーしたが……

—— パンツ！

【いいから、『言われた通り動く』んだよ】

(っ？！ またっ、身体が……腰が、勝手にい……っ)

少年が魔法を使ったらしく、身体の動きが勝手に加速。蟹股のまま高速で腰を振りたくり、娼婦じみた淫らとなる。

【そうそう、やっぱりやればできるじゃんエルザさん】

「お前またっ♡ 人の、身体の動きをお……っ♡」

【あれ？ 何でちょっと感じた声になっているの？ ドスケベダンス見られて興奮した？】

「……見られて、興奮など♡ しない……っ♡」

【ああ、お客さんに視姦されたら、って想像したんだ】

「だっ、黙れええ♡」

小さな声で怒りをぶつける。しかし言葉とは裏腹に身体は卑猥な踊りを続けており、余計に滑稽かつ淫猥なことになっている。

【いーねー。その調子で淫語も言ってくれたらいいんだけど】

「誰が……っ♡ そこまで、やると……っ♡」

【えー？ せっかく興奮してきたのに……ホラこれ見てよ、エルザさんを種漬けしたくてもうバッキバキになっている】

「っ♡ み、見せるな……っ♡」

言われて、つい少年の屹立する巨根に視線が行ってしまう。

先程の胸奉仕の時と変わらない精力、牝が理想とする大きさを保っており、見ただけで本能が思わず反応させられる。

自分の踊りで昂ぶってくれたことによる牝としての達成感、より優秀な精力……優秀な雄を受け入れたいという欲求が刺激され、

下腹部がクンツ♡ と蠢くのを感じてしまう。

(落ちて……♡ 見られて興奮するなど……♡ こんな下衆のモノを求めるなどお……♡)

【ほら、肉便器としてこのチンポをイカせたいんでしょ？ 淫語くらいさー】

「黙れ……♡ 嫌々やっているだけだ……♡ 私は……そんなチンポなど……♡」

【そっかー。じゃあ代わりに回転してよ】

また拒否すると、なんとか淫語は諦めてもらえた。しかし代わりに回転……踊りながら角度を変えることを要求される。

横や後ろからのアングルで踊りを眺めたいのだろう。

「……よく、そんなことを思いつくものだ……っ♡」

【これもイヤなの？ ああ、それともそんなにこのチンポが見たかった？】

「……………」

これ以上刺激しない内に黙って従う。

少しずつ角度を変え、少年から見てエルザが正面から横を向き、更に角度が変わって後ろ向きになる。

「っ♡ ……っ♡」

(今……私の尻を、見ているのだろうな……♡ それに、この位置……♡ 客人が来たら、完全に、顔が合ってしまう……♡)

逆向きになっただけで、意識が大きく変化。

少年に見られる部分が背面……尻となり、そこにも視線を感じてより身体の熱が高まる。

また半開きになったドアを見ることで、客人の存在を強く意識させられ、発見され視姦される緊張感が高まり、それがまた身体を昂ぶらせてくる。
【どうエルザさん、お客さんがいるのにこんなドスケベダンスしてる気分は？ こんなとこ見られちゃったら大変なことになるね〜♪】

「黙れ♥ お前が無理矢理命令しているんだろう♥ この卑怯者……っ♥」

(こんなところを♥ 雄に媚びるドスケベダンスしているところを見られたら♥ そ、それだけで……っ♥)

「お、お前はどうか♥ いい加減、早くイケえっ♥」

見知らぬ者に視姦される背徳的興奮。それを振り払うように、少年に対して逆に指示を飛ばす。

【うーん、やっぱり見るだけじゃムリかなあ。そのドスケベ尻で尻コキするから、悪いけどそのまま踊ってくれる？】

「なっ……し、尻コキだと……♥」

踊りの次は尻コキ……尻で肉棒を擦るよう命令される。ややマニアックなプレイで、しかも踊りをしながらという変態ぶりに驚愕するエルザ。

【イヤなら今すぐ、エルザさんのドスケベダンスのせいでバッキバキになったこのチンポで種漬けてあげてもいいんだよ〜？】

(ば、バッキバキのおちんぽっ♥ 私のドスケベダンスのせいでっ♥ そ、それだけは、許してはならんっ♥)

「……好きにしろ……っ♥」

許可した直後、少年が接近。『エルザのドスケベダンスのせいで』見事に雄々しく硬化した巨根が、振りたくられる爆尻の割れ目に宛がわれる。

「ひあ……♥」

【ああ……やっぱり想像通りの気持ち良さだよ。ほら、もっと早く！ 限界まで腰振って！】

「ふっ♥ ふううっ♥」

【もっと激しく！ 早くしてくれないと、ドスケベダンスと尻コキでアへってるとこ視姦されるよ！】

「ひいっ♥ し、視姦っ♥ それだけはあぁっ♥」

じゅば♥ ずりっ♥ ずらゆっ♥ ずりゅうっ♥

「ふっ♥ ふひっ♥ ひっ♥ ひいっ♥♥」

視姦だけは避けなければならぬ。だというのに、その実 視姦されることに心のどこかで期待し、その興奮のまま尻を振る。

そして少年ではなくエルザの方が先に興奮の限界まで達し——

(イクっ♥ 見られるかもしれないのに♥ こんな屈辱的な奉仕でええっ♥♥)

ずぶりゅうっ♥

「んんんおおおおおおおおおおおおおおおおお♥♥♥」

——絶頂。またも牝本能を剥き出しにした絶叫を上げ、蟹股を震わせて牝潮を噴き出すという痴態を見せることになる。

「は……っ♥♥ は……っ♥♥」

(ま、また♥ イッてしまった♥ 見られるかもしれないというのに♥♥)

【まーた大声出しちゃったね……そんなにバレたいの？】

「……………っ♥」

少年に指摘され、沈黙でしか答えることができない。そして、未だに少年は射精していない。

【それにしても、またエルザさんが先にイッちゃったかー。期待してたんだけど……しょうがないかあ】

エルザの前戯による奉仕では満足できない少年。ついにエルザのバニースーツの股間部をズラし、陰部を露出させる。

「ひっ♥ ま、待て♥ まだ、私は……♥」

絶頂直前の身体ではエルザも抵抗などできず、また自分より力が劣る者によって力尽くで犯される。

「やめ……」

ずぼおっ♥

「んおおおおっ♥♥」

犯されるにしても、せめてベッドの上に移動してからだと思っていたエルザ。

まさか全く移動せずドアのすぐ近くで、とは予想外だったこともあり、無防備な牝肉に巨根の一撃を食らって堪えず悶絶する。

「お♥ お前っ♥ せめて……ベッドでっ♥ ここはあ♥」

【あんだけ大声出しておいて今更？ すぐ済ますから大丈夫だよ、それにバレるならもうバレてるって】

ぼあんっ♥ ぼんぼんぼんぼんっ♥

「ひおっ♥ お♥ おっん♥ んんんんんん♥」

本当にただ手っ取り早く性欲を満たしたいだけなのか、力任せな荒いピストンが叩き込まれる。

そんな雑な責めでも今のエルザには抗えない快樂を生み出し、声を抑えることを僅かな間だけ忘れさせられるほどだ。

(いっ今♥ 今だけは見つかってはダメだ♥ 声を抑えなければっ♥ 早く♥ 早く終わってくれえっ♥)

心の中で懇願する。それに対し、少年は更にエルザに対して要求を追加する。

【ただヤラれてないで、イカせてくれるためにドスケベダンス続けてよ】

「なっ♥ おまっ♥ この状況でっ♥ ドスケベダンスなどっ♥」

——パンッ！

「おひいっ♥♥ 腰っ♥ またあ♥ 動くうううっ♥♥」

少年に強く言われると、なぜか身体が従ってしまう。

淫猥な踊りが再開し、蟹股で腰を前後させてピストンを迎えることで肉突きの威力が倍になる。

「ほふっ♥ おっ♥ やめっ♥ やめろっ♥ 腰がっ♥ おまんこがあぁっ♥♥」

【ははは、見られたらどうしようとか考えないの？ スゴい恥ずかしいことになってるよ？】

「だからっ♥ それはお前が♥ お前があああ♥♥」

【ちなみにエルザさんにとって一番見られたら恥ずかしいポーズってどんなの？ せっかくだし教えてよー♪】

「おっ♥ 教えるか♥ 今のままで充分♥ 恥ずかしいに決まってるうう♥♥」

【ふう〜ん……】

——パンッ！

【『一番恥ずかしいポーズをする』】

「ひいっ♥」

（今度は手が♥ 勝手に♥ おまんこをおおっ♥♥）

少年に命令され、手が勝手に動く。結合部に手を伸ばし……なんと自らの手で陰唇を左右に開く、という淫猥極まるポーズを取ったのだ。

【えっ、いくらなんでもやりすぎじゃない？ 自分からおまんこ広げるとかドスケベにも程があるでしょ……】

それが一番『見られたら恥ずかしいポーズ』か〜】

「私ではないっ♥ おまつ♥ お前があああっ♥ やめろっ♥ 早くっ♥ おかしな術を解けええっ♥」

【ちなみに、もし……もしだよ？ こんなところ見られたら、エルザさんどうなっちゃうのかな？】

懇願を無視し、少年が嘲笑う。そして……

——パンッ！

【『自分を覗き見している視線に気付く』】

「こんな真似っ♥ 見られていいわけがっ……………ツツツ?!?!」

少年が呟いたその時。ドアのすぐ向こうに、小さいが確かな気配——他人の視線を感じとる。

（みっ♥♥ 見られっ♥♥ そんなっ♥♥ 本当に——♥♥）

遂に見られてしまった——それに気付いた時、エルザは半狂乱になって逃避を図る。

「あああっ♥♥ んおっ♥♥ おおおお——っ♥♥」

（見られたっ♥♥ 見られたのにいっ♥♥ 身体があっ♥♥ おまんこがっ♥♥ 溶けるうううっ♥♥）

だが羞恥と失意が強いほど、背徳の炎が燃え上がる。

即座にエルザの身体は欲熱に支配され、淫らすぎる性行為を視姦される快感に呑み込まれる。

「おほっ♥♥ おおっほおっ♥♥ やめ♥♥ やめっお♥♥ みられ♥♥ くひい——っ♥♥」

（見るなっ♥♥ 見るな見るなあっ♥♥ 私のおまんこっ♥♥ 自分で広げたおまんこ見るなあああっ♥♥）

恥辱で真っ赤になった美貌を左右させ、少年に視姦されていることを訴えようとする。だが快感のあまり、まともに言葉が出せない。

むしろ下手に話そうとしたことで浅ましい喘ぎ声となり、それが少年を興奮させ——

【見られたの想像してそんなに気持ち良くなった？ おまんこ締め付け過ぎだよ……お望み通り、出してあげるよっ！】

「ひいっ♥♥ やめ♥♥ 今は♥♥ 待っ♥♥ んおおっおちんぽおおっ♥♥」

（ダメだ♥♥ 嫌だっ♥♥ 今っ♥♥ 見られてるのになっ♥♥ 中出しっ♥♥ 中出しされるところまでえええっ♥♥）

体験版はここまでです。続きは製品版で！